27

その時、私は…

安達　かよ

「ねえ、何ばプレゼントする。」
「何がいいかな。」
　五月の第二日曜日、今日は母の日です。私たちきょうだい四人、朝早くから集まり、わずかではありますが、お金を持ち寄って、いつもお世話になっている母と祖母に感謝の印としてカーネーションと何かプレゼントをしようと話し合っていました。夕食の少し前に私たちは、父とプレゼントを買いに行きました。いよいよ夕食事、私と一つ違いの妹と弟の三人で、
「誰がやると。」
「花は誰。」
などと、隅っこで話し合っていました。しかし、なぜか、一番下の八つになる妹だけは、母と祖父の間に座ってじっとしていまいた。心なしか妹は、私たちに何か言いたそうに見えたのですが、私は、そんな妹を気にもとめず弟たちとプレゼントを渡す準備をしていました。そして私たちは、それぞれにプレゼントを持ちささやかながらもごちそうのならんでいる食卓へ行き、母と祖母に、「いつもいつも苦労ばかりかけてすみません。それと、ありがとうございます。」と感謝の一言をそえてプレゼントを渡しました。
　その時、今まで黙っていた妹が急に祖父に向かって、「じいちゃん、じいちゃんには、何も

なくてごめんね。」とこう言ったのです。すると横にいた母が、目にいっぱい涙をためて、妹をしっかり抱きしめました。私は、何か鋭い物で、胸をつき刺されたような感じを受けました。瞬間私たちは、魔法にでもかかったかのように、シーンとなったのです。〝しまった〟私はとっさにそう思いました。あの時妹は、祖父のことを心配して、じっと座っていたのか、私は、なぜもっと早くその気持ちに気づいてやれなかったのか、もっとまわりに気を配らなかったのか。私は、反省するばかりでした。姉でありながら、その時の状況にも気づかなかったことがどんなに恥ずかしいことであったか、私は、妹に頭が上がらない思いでした。
　後から母が、「あの時ね、きわが言ったことは、お母さんにとって何よりの母の日のプレゼントやったとよ。」と私たちに話してくれました。ワイワイ騒いでいる私たちとは反対に、だまってじっと座っている妹の気持ちが横に座っている母には、よくわかったのでしょう。母はまた、こうも言いました。
「あがん思いやりのある子に育ってくれて、ほんとにうれしかよ。」と…。
　思いやりの心。現在の私たちには、この心がだんだん薄れて来ているように思えます。物が豊かになる程、心が貧しくなっている人が多くなっているのではないでしょうか。たとえ口では、「思いやりのある人になりたい」などと、軽くは言えても、現実は、そうたやすくありません。人を思いやる。人につくす。人に優しくする。ただ単にそのようなことをやるというのではなく、その人の気持ちを充分理解し、相手の身になり、親身になって考える。そのことが、まず、最初に大切なことではないでしょうか。

今は亡き、私の小学校時代の恩師が「人が悲しんでいる時は、自分も一緒になって悲しめ、そしてはげましてやれ。人が喜んでいる時は、自分も一緒になって喜べ。そげんできる人間にならんばいけんとぞ。」といつも口ぐせのように言っておられました。私は、この言葉を思いだすたびに「こういう人間にならなければいけない。本当にその人の身になり、相手を理解し、そして、その人のためにつくしてあげられる人間になろう」と思うのです。たとえ自分がどんな場合にあっても、人を恨んではいけない。難しいことかもしれませんが、決してできないことではないと思います。もっと相手の身になって考えてみてください。

ここで私は、あえて「してあげる」という言葉を使いましたが、そのことは、決して、自分を上に見た考えではなく、仲間を支えるということなのです。そうすることによって自分も何らかの形で、支えられることがあると思います。私は、あの時の妹の言葉で、私たちが生活していくうえで、一番大切な事を教えられたように思います。人を思いやり、人につくし、そして、お互いに支え合って生きていくということが、どんなに大事なことであったかということを。

昭和六十年度『少年の主張コンクール』入賞作品

（次ページから掲載している作品は、母親になった本作品の作者が、少年の主張三十周年記念大会で行ったスピーチの内容をまとめたものです。）

キラキラ輝くステキな人に

植木（安達）かよ

今日の皆さんと同じように私が少年の主張に出場したのは中学三年生の時でした。それから二十数年経った今、またこの壇上から少し大人になった私の思いをお伝えできるというとてもすばらしい機会を与えていただきましたことに感謝いたします。

このご依頼をいただいたのはとても不思議なご縁のつながりからでした。私は今、南島原市の図書館で臨時職員としてお手伝いさせていただいております。そこで、ある方から「これかよちゃんよね？」と見せられたのが一冊の冊子でした。そこには中学三年生当時、この大会で発表した文章が載っていました。ただ懐かしく当時のことを話していると館長が「せっかくだから記念にもう少し送ってもらおうか。」と言ってくださったのでお願いをしました。数日後、私の手元にこの一冊が届きました。懐かしいようなちょっと気恥ずかしいような不思議な思いで読ませていただきました。

それから数か月後、全く知らない番号から電話が。少年の主張三十周年の記念大会でスピーチしていただけないかというご依頼の電話でした。ただ、びっくりし、「今の私はごく普通の一人の主婦ですが」と申し上げましたが、「是非」とおっしゃっていただきましたので、これも何かの縁、私でお役に立てるのであればとお引き受け致しました。縁というものはとても不思議で、すばらしいものだと改めて感じました。

どんなことをお話したらよいだろうと考えながら、これまでの私の歩んできた道を少し振り

返ってみました。飛び上がるくらい嬉しかったこと、自分を見失うくらい辛く悲しいこと、数えきれない程のいろんな出来事がありました。その度に一喜一憂し、泣いたり笑ったり。三人の子育てをしている今でも、毎日がその繰り返しです。でも、どんなことも今の私ができる上で大切な栄養素になっているのだと思っています。そして、そこには必ず、人との出逢いがありました。生まれて初めて出逢う人、父と母。これまでずっと無類の深い愛情で優しく、時には厳しく育ててくれました。大人になった今でもまだ叱られることもありますが：。そして、妹や弟、祖父母、友達、先生、同僚や上司、近所のおばちゃん、ママ友達。それに加えて、この少年の主張に出られたことによって普通ではあり得なかった多くの出逢いを経験することができました。本当に感謝しております。時には人と接することすら避けたいと思うこともありましたが、自分が辛く苦しい時に出逢った人に必ず手を差しのべてもらい助けられました。

十数年前、すでに社会人になっていた私は、これから自分がどう進むべきか悩んでいました。その時、偶然再会した高校時代の国語の先生に「安達さんはいつも何かやろうという思いは持っているんだけど肝心の一歩を踏み出せないよね。」と言われたことがありました。ショックでした。胸の奥にあった的を見事に射抜かれたようで、私にはとても衝撃的な言葉でした。しかし、それ以上に私の事をちゃんと見ていてくださったということが、何よりも嬉しかったことを覚えています。先生の言葉で私の弱点がそこだったのだとはっきりわかり、一つ吹っ切れたように思いました。それからの私は今まで億劫（おっくう）だと思い避けていたことにもできるだけ積極的に取り組むよう心がけました。

人は誰も、ひとりでは生きていけません。助けたり、助けられたりしながら、いろんなことに気づき、成長していくものだと思います。結婚をし、母となった今、私はどんな小さな出逢いも大切にし、そして感謝しようと思うようになりました。出逢いによって気づかされたり、勉強になったり、楽しみが増えたり、なんだか不思議なエネルギーが湧いてきたり、出逢いは私にとって人生での宝物であることは間違いありません。

そして、私にとって、これまでで一番の大きな出逢い、それは夫と命をかけて守ろうと思える存在である三人の子供たちとの出逢いです。親という仕事は休むことも途中で辞めることも絶対にできない大変なことですが、親になったことで私のこれまでの考え方や生き方も大きく変わりました。家族の存在によって、心から人を愛するということを知りました。

今まで私は、夢を諦めたり、途中で挫折することが多く、落ち込む度に必ず誰かに助けられてきました。その度に「この人に出逢えてよかった」と思いました。何の取柄もない私ですがたくさんの方に支えられ、親という仕事も十年近く続けてこられました。これからは、支えられるばかりでなく、私と出逢った方に「あなたと出逢えてよかった」と思っていただけるようなそんなステキな人を目指したいと思います。

そして、今日皆さんとの出逢いも大切にし、ステキな人になるべく、これから努力していきたいと思っています。皆さんもこれから訪れるであろうたくさんの出逢いを大切にし、キラキラ輝くステキな人になってくださいね。

平成二十年度『少年の主張』三十周年記念大会より